準備講座❸ 文学的文章の読み方

実力テストや入試では、初めて目にする文章を、限られた時間内に読んで理解し、解答しなければならない。文章のどこに、どのようなことが書かれていたかをすぐに確かめられるように、目印を付けながら読む練習をしてみよう。

◇前書きをチェック！

読み取りに役立つ情報（時・場所・人物・出来事など）が書かれている。

◇登場人物をチェック！

- 少年（おにいちゃん）
- 弟（アツシ・アッくん）

同じ人物を違う言葉で表す場合があるので注意する。

◇場面変化をチェック！

- 時間の経過
- 場所の移動
- 出来事

などの変化をつかむ。

―商工会館へ向かう―

少年は、「海に行きたい」という弟のアツシにせめて海を見せてやろうと、二人で出かけた。小さい頃から視力が弱かったアツシは、目の手術のために明日から大学病院に入院する。

入院は二週間の予定だった。目の中にメスを入れるというのに、意外と短い。そんなに難しい手術ではないのかもしれない。でも、もしも、もしも、もしも……と考えると、「もしも」の向こう側にあるものがどんどん近づいてくる気がする。怖い。だったらなにも考えなければいいのに、勝手に考えてしまう。両親に文句を言いたい。もっと早く手術を受けさせていれば、少年も幼すぎて「もしも」のことは考えずにすんでいたのに。

商工会館の建物が見えた。あと少し。少年は息を詰め、歯を食いしばって、自転車を押していく。汗が目に滲みる。拭き取りたくても、ハンドルを片手で支えるのは無理だ。目がチカチカして痛い。汗と涙がにじんだ目に映る風景は、揺れながらゆがんでいた。

日曜日の商工会館は玄関に鍵が掛かっていた。少年はあきらめきれずに玄関のガラスドアを押したり引いたりしたが、アツシはさばさばした様子で「おにいちゃん、と二人乗りしたから、面白かったから、もういいよ」と笑った。

―出入り口を探す―

「だめだよ、そんなの」

開いている出入り口がどこかにあるかもしれない。たまにはそういうことで「もしも」を使いたかった。

「勝手に入ったら怒られちゃうよ……」と逃げ腰のアツシの手を引いて建物の裏に回ると、非常階段があった。落ちないように柵のついた、らせん階段だった。

よし、と少年はうなずいた。方角も海のほうを向いている。いいぞ、と頬がゆるんだ。「もしも」が当たった。めったに当たらないから「もしも」なのだから、もう一つの「もしも」は、これでもうはずれる――と、いい。

前書きから読み取れる状況

・時…弟（アツシ）の入院の前日。
・出来事…弟の願いをかなえるために、二人で海を見に行く。

3～10行

弟の手術が成功するか、不安でたまらない少年
「もしも」の向こう側にあるもの
＝＝ 不吉な「もしも」
もしも手術が失敗したら、弟はどうなるのか。
（目が見えなくなってしまうのでは？）
不安と、弟を乗せた自転車の重さに耐えながら商工会館を目指す。

11～21行

弟に海を見せることをあきらめない少年
もしも開いている出入り口があれば、海を見せてやれる。
←― 幸運な「もしも」
海の方角を向いた非常階段があった。
幸運な「もしも」が当たったのだから、不吉な「もしも」ははずれてほしいと願う。

◇様子・気持ちがわかる表現をチェック！
内容ごとに印を変えてマークする。

少年の様子
少年の言葉
弟の様子

◇題名をチェック！
キーワードや主題を表していることがある。

非常階段を上り、海を見つける

階段を上った。転んだときのためにアツシの後ろに回った少年は、「手すり、ちゃんと持ってるか」と何度も声をかけた。階段の段差はけっこうあって、まだ小さなアツシは、一段ずつ踏ん張らないと上れない。でも、それがかえってよかったのか、アツシは一度もけつまずくことなく、よいしょ、よいしょ、と上っていった。

三階から四階に上る途中で、まわりの建物の高さを超えて、視界が開けた。

「アッくん、海、あっちだから」

少年が指差す方向に目をやったアツシは、途方に暮れた顔で「どこぉ……？」と訊いた。

「もっと先だよ、ずーっと先のほう」

見えるのだ。ビルや家の建ち並ぶ街を越えたずっと先に、空よりも微妙にまぶしい、コンタクトレンズのような形の入り江が小さく見える。間違いない。あれは海だ。

檻の鉄格子をつかむ動物園のゴリラみたいに、アツシはしばらく黙って柵に顔を張りつかせた。

カウントダウンは十。少年はそう決めた。十数えても海を見つけられなかったら、もっと上まで行けばいい。このビルは六階建てだから、どこかで海を見つけられる。絶対にだいじょうぶ。自分に言い聞かせて、いーち、にーい、と数えはじめて……な、で終わった。

「わかった！　見えた！」

アツシの歓声が、鉄の階段にキンと響いた。

海を眺める兄弟

二人はしばらく黙って、街と、空と、海を眺めた。ときどき顔を見合わせて、アツシはうれしそうに、少年は照れくさそうに、笑った。アツシのほうが階段の上の段にいるので二人の顔の高さはほとんど同じで、正面から見るときにはアツシのメガネの渦もそれほど目立たないんだな、と少年は気づいた。

「夏休みになったら、ほんとに海に行こう」

少年が言うと、アツシは「泳げる？」と訊いた。

「泳げるし、お母さんに水中メガネ買ってもらって、もぐって遊ぼう」

「お魚、見える？」

少年は息をすうっと吸い込んで、「アッくんの目が良くなったら、見えるよ」と言った。

「だから見えるんだよ、絶対、百パーセント」

〈重松清「おとうと」より〉

22〜38行
弟を気遣いながら、海が見えるところまで階段を上っていく少年
視力の弱い弟に海の方向を教える。
←
一生懸命見ようとする弟
←
「絶対にだいじょうぶ」自分に言い聞かせる。
海が見えなかったら……　}不安を打ち消す。
手術が失敗したら……
どうしても弟の願いをかなえてやりたい。
←
海を見つけた弟が歓声をあげる。

39〜48行
海を眺めて笑い合う少年と弟
弟…おにいちゃんが海を見せてくれてうれしい。
少年…弟が喜んでくれてうれしい。
「夏休みになったら、ほんとに海に行こう」
「アッくんの目が良くなったら、見えるよ」
「だから見えるんだよ、絶対、百パーセント」
←
・楽しい未来の話をすることで、手術を受ける弟を励ましたい。
・不吉な「もしも」を考えないように、弟の目は良くなると自分に言い聞かせている。

作品の主題
手術を受ける弟を思いやり、励まそうとする少年の優しさ。